
~ Cafeハイツへようこそ！ ~

choco（青い花）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

） Cafeハイツへようこそ！ ）

【Nコード】

N0387Q

【作者名】

choco（青い花）

【あらすじ】

あたしは4月からひとり暮らしする為の部屋を探していた。大学近くの街に足を運んで、毎日探索するとある道路前を通る。その先にハイツと共にあるCafeが視界に飛び込んできた。Cafeのあるとっても素敵なハイツが気に入ったあたしは、速攻で入居を決めたの。

ハイツ住人たちと趣味でCafe経営する大家さんとあたし。のんびりでほのぼの、時に切なくも愛おしい日々。そんなあたした

ちのC a f eハイツを一度のぞきにきて下さい。
第8杯？ 12月05日 20時頃更新予定

第1杯 新生活はじめました。（前書き）

書き始めなので、内容などが修正入るかもしれませんが、
復帰はじめて文章が乱れているかと思いますが、
そこはご愛嬌という事で（笑）

第1杯 ？ 13日23時更新予約

第1杯 新生活はじめました。

あたしは大学合格と同時に何ヶ月も4月からひとり暮らしする為の部屋を、大学近くの街で探していた。

そんなある日、突然——それは目の前に現れるのだった。

小さな道路前を横切ろうとした時、あたしの視界にC a f eを設けているハイツが、とび込んでくる。

その素敵な雰囲気が入ったあたしは、すぐに物件があるかを、街の賃貸ショップに問い合わせた。

まだ空き部屋がある、とショップの担当者に聞いて即決で住むことを決めたのだ。

それがあたしの新生活の始まりになった。

大学を終えて、まっすぐに帰ってきたあたしは、部屋で講義の復習を踏まえ、ノートにわかりやすく今日学習した事をまとめていた。ふと、視線が静かな部屋に向く。

自分以外誰も居ない部屋。あるのは実家から出る時に持って来た家具だけ。

当たり前だけど、この部屋からは人が話す声、テレビの声などが聞こえない。

急に実家のにぎやかさを思い出し、急にさびしくなる。

そんな静かな雰囲気にいたたまれなくなり、あたしは部屋を出るのだった。

部屋があるのはハイツの3階部分。

3階は女性しか住んでないし、男子禁制でもある。それにドア前の廊下を進んで階下に行く前の階段には約4メートル程の鉄柵。

鉄柵にはご丁寧にも頑丈そうな錠が取り付けられている。

それを見て思い出す——あたしがこのハイツに住む前に賃貸ショップで説明された事を。

「えーと、それではですね、宮野董子さまご契約前にご確認ですが、こちらの物件はまずおひとりで住まれる事。異性の出入は禁止である事。住人同士の恋愛は禁止である事を条件にお貸しさせて頂いております。その点をご了承頂いてのご契約でよろしかったでしょうか？」

目の前にいるショップの店員があたしに最後の契約の確認をする。にこやかに答えるあたし。

「はい、大丈夫だと思います」

「では、最後こちらにご捺印お願い致します」

「あっはい」

店員に促がされたあたしはテーブルにある契約の書類に判をおす。それからハンコに付着した朱色のインキを拭いて、鞆になおしながら、あたしは鍵の事をたずねる。

「部屋の鍵はいつ取りにければいいですか？」

「ご入金を確認致しましたら、部屋の鍵と階段を上がった廊下前にある鉄柵の鍵をお渡しとなりますので、こちらからお電話させていただきます」

「えっ鍵って、ふたつもあるんですか？」

「そうでございますね、その階の住人の方にお渡しする事になっておりますので」

「そうですか——」

店員がホッと胸をなで下ろす様子が気にはなっただけど、あたしはそれよりもハイツが気にいっていたので、深く考える事もなく了解した。

第1杯 新生活はじめました。(後書き)

活動報告更新(主に更新予約時間お知らせなど) C h o c c o 2 0

1 1 . 1 . 1 3

少し文章を修正。

C h o c c o 2 0

1 1 . 2 . 1 8

第1杯 ？（前書き）

第1杯？ 1月16日予約投稿。

第1杯？

後日、ハイツに来て、ここで初めてこの鉄柵を見た時は、少し驚いたけど、今はこれがあるおかげで防犯の事を心配する様な事もなく、とても助かっている。

あたしは鉄柵を開けて鍵を閉めてから、下の階に下りる。

2階も造りが同じで階段から廊下へ出る手前に鉄柵がある。逆に2階は男性の住人しか住んでなく、女性住人は2階に入れない。

建物にまだ見慣れていないあたしは色々観察しながら、やっと最上階の部屋から目的の最下層に到着。

あたしの目の前には大家さんが趣味で経営するあの素敵なCafeがある。外に出なくとも階段から数歩進めば、Cafeの入り口が。

センサーが感知したのか、自動で目の前のガラスのドアがあく。店内は通りからも中の様子が見えるコの字型のガラス壁。その壁にテーブルなどが数個置いてある。一般の方は営業時間のみで利用するようになっていて、住人は営業時間以外24時間入れるようである。

「いらっしゃい、トウコちゃん」

白髪混じりのキレイに切りそろえられた短髪。整った髪が好印象の年配男性がコーヒークップを片付けてから、こちらをみて、やさしく微笑んだ。

「こんばんわ、大家さん」

あたしもその微笑に答えるように微笑む。

「どうかしたのかい？」

「うーんと、なんとなくコーヒーが飲みたくなって」

そう答えながら目の前の椅子へ進み、あたしはいつも座るカウンター席に腰掛ける。

人恋しくなると、ここへ降りてコーヒーを貰い、大家さんと世間話。

コーヒーはその時の体調や気分に合わせてドリップしてくれる。しかも、ここの住人はタダで飲めるシステムで、とっても重宝している。

C a f e のコーヒーが大好き。大家さんの暖かい人柄とここがすっかりお気に入り、いつも癒してくれる。

今日もいつもの場所にそれぞれ人がいるみたい。

カウンター席では奥に女性が一番端にいる。いつもの席でコーヒーを飲みながら、誰かと携帯で話している様子。

もう一人は道路が見えるコの字型ガラス壁に沿って置いてあるふたり掛けのテーブルに、くたびれ感じのサラリーマンの姿。

女性の髪は肩よりも長く今流行のゆる巻きパーマ。少し茶色がかった痛んだ毛。歳はあたしより少なくみて2歳ぐらい離れているといった感じ。

男性はセットしていた髪の毛が少し乱れて、服はスーツにしわがついている。自分の身なりに気を使う事もできないくらい疲れている模様。

コーヒーを待つ間、C a f e の様子をごく自然な態度で観察する。あたしがカウンターに振り向いた瞬間、しばらく携帯で話をしていた女性と目が合う。以前も閉店後ココに居る時にもこちらを気にかけている様子だったけど、住人とわかっていてもお互い話しかける事までは、なかなかできない物。

第1杯 ？（前書き）

第2杯 19日22時頃投稿予約

Choco・2011・1/19

第1杯？

そんなあたし達ふたりの空気を察してくれたのか、大家さんがあいだを取り持って、女性に紹介しはじめる。

「この子は10日前ぐらいから、ここに住んでいる宮野董子ちゃん」「ふーん、若そうね」

「この春から大学生になったのかな？」

「はい、そうです」

「そうなの。だからかあ……えっと、私はね、隣の隣に住んでる岡島ますみよ」

岡島さんの言葉が少し引つかかるけど、あたしは気にせずに自分も挨拶を返した。

「どうも、宮野です」

「私は29のOL。よろしく」

「わからない事とか教えてもらえると助かります」

「なんでも聞いて。ここ結構長く住んでるから」

あたしの顔をまじまじみながら、こちらに岡島さんが近づいてくる。そのまま彼女はあたしの隣の席に座った。

「あーやっぱり肌がつやつやしてるね」

「いえ、そんな事ないですよ」

「またまた」

「岡島さんの方こそ、歳が2つくらいしかちがわないのかと、逆に」「そう？ 董子ちゃんもスピンの割に肌綺麗よ。ちゃんとお手入れしてるんだね」

「んゝ特には。洗顔して、化粧水つけるぐらいかな」

「化粧水だけだと、今はいいけど。化粧水後は乳液もつける方がいいんだから」

「乳液した方がちがいますか？」

「何言ってんのっ違うわよっ全然！」

「はっはあゝ。あたしそういうのうとくて」

「乳液つけないとね、そのまま化粧水が蒸発するのよ」

「へえゝそうだったんだ」

「そうなの。それと他には――」

まだまだ話し足りないといわんばかりの岡島さんの話をさえぎる大家さん。

「まあまあ、そのくらいしておいて、コーヒー冷めない内に、どうぞ」

岡島さんの飲んでいたカップをそつと置いた大家さん。そのまま彼女に微笑んでいる。

大家さんの気の利いた行動で、岡島さんからはあたしの気が殺がれた模様。

「トウコちゃんもクルミ・ミルク・コーヒーどうぞ」

大家さんがそう言うと、生クリームに胡桃をトッピングしたコーヒーがあたしの前に置かれた。

「クルミの香ばしい薫りがしますね」

「そうね、いい薫り」

岡島さんにもコーヒーの薫りがいつているらしく、薫りを楽しみ

たいのか、鼻から湯気を吸い込んでいた。
その様子を見ていた大家さんがガラスコップを拭きながら、あたしたちに説明してくれる。

「そうだね。炒った胡桃をトッピングしたからかな」

「へえ、だからかあ。それとすごくミルク感があつて飲みやすいです」

「そうかい。温めた牛乳にコーヒーを加えて、最後に生クリームを添えたんだよ」

「ホントに甘くておいしい」

「よかったよ、気に入ってもらえて」

そのやり取りをきいていた岡島さんはうらやましそうな表情。

「私もマスターに作ってもらおっかな」

「岡島さんも今からお作りしましょうか？」

「今日はいいいかな。今度お願い」

「はい、かしこまりました」

「じゃあ、あたしはそろそろ部屋に戻りますね」

「そうかい。カップはまた朝にでもいいし、学校が終わってからでも返しにきてくれればいいよ」

「はい、それじゃカップ戻しに明日来ますね」

ふたりは部屋に戻るあたしへ最後に声をかけてくれる。

「また明日にだね。おやすみなさい」

「おやすみ、またね」

それに答えてあたしもカップ片手に席を立ててからふたりに挨拶する。

「おやすみなさい」

第1杯？（後書き）

【準備】くるみは薄くスライスしておきます。

2人分レシピ

牛乳150cc・

くるみ/炒ったもの15g・

コーヒー粉/深煎り15g・

生クリーム/半立て15cc（大さじ1杯）

（1）鍋に牛乳、くるみを入れて、火にかけ、途中かき混ぜながら沸騰させます。沸騰したら弱火にし、30秒程煮込みます。

・（2）火を止めてコーヒーを加え、1分間おきます。

・（3）温めた器に目の細かい茶こしでこしながら注ぎます。半立ての生クリームを浮かべ、くるみを飾ってできあがり。

お好みで砂糖を入れて召し上がりください。

第2杯 この瞬間がものすごく好き。(前書き)

タダほど高くつくものはないっ!?! ↓この瞬間がものすごく好きに
題名変更しました。

2011/2/3/9:00 Choco

第2杯 この瞬間がものすごく好き。

大学から戻り、ひと休みしていた部屋でくつろぐあたしは、暇なので昨日のカップを届ける事にした。

「さてと、カップでも返しに行こうかな」

あたしはひとり呟いてから、寝る前に洗っておいた昨夜のカップをキッチンに取りに行く。真っ白な柄もないシンプルなカップを手に取り、下の階にあるC a f e に行くため玄関を出る。

大学から直で帰ってきたから、C a f e はまだ営業中。夕方だからかはわからないけど、店内にはちらほらお客さんの姿も。

「いらっしやい、トウコちゃん」

自動ドアをくぐった瞬間に大家さんがいつもの穏やかな物腰で迎えてくれた。

あたしも早速そんな大家さんへ話かける。

「あつ大家さん。はい、コレ」

あたしはカウンター席の空いていた場所に腰かけて、手に持っていたカップを手渡す。

「昨日のカップだね。洗わなくてもよかったのに」

「でも、昨日借りた物だったから、洗わないと気持ち悪いかなって」
「それもそうだね」

大家さんは自分の言葉がおかしかったのか、クスツと小さく笑っ

て頷いている。

ひと通り大家さんと話した後、昨日の女性が店内に入ってきた様子。横切りかけて、ふと――あたしの目前で止まる。

「あれ、昨日の――えっと、董子ちゃん？」

声をかけられたあたしは顔が見える様に彼女のいる方へ少し振り返った。

「そうですよ、岡島さん」

「名前あつててよかった」

ホッとしたのか岡島さんはそう言つて、いつものカウンター席奥じゃないとこに座つていた。それはあたしのすぐ傍だった。

仕事に専念していた大家さんがこちらを振り返る。

「いらつしゃい、岡島さん」

軽く視線を大家さんに向け、岡島さんは手で挨拶してからこちらに話しかけてくる。

「昨日のカップ返しに来たのね」

「ですね、岡島さんはこの時間からいつもここに？」

「まね」

「ふん、そうなんですか」

「あゝ今暇なやつって思つたんじゃない？」

「えっ、そそんな事はないですっ」

「まあいつもって訳じゃないけど、野暮用がない日や嫌な出来事とあつた時は大概ココにいる」

岡島さんは笑ってあたしに少し恥ずかしそうな、照れているような、そんな感じの表情をみせる。

「そうなんだ。確かにココって居心地いいですね」

「っん、そうそう。居心地良すぎて、董子ちゃんもそう思ってるのか」

「もちろんです」

「そんなんじゃ嫁に行き送れるぞって、あたしには言われたくないか」

自虐ネタ話で盛り上がって来た所、あたし達はお互い顔を見合わせて笑う。そこに大家さんが目を細め、ふたりに声をかけてきた。

「ふたりとも、楽しそうだね」

「えっ」

大家さんの声掛けにあたしたちふたりの声がハモって、それがまたおかしくて笑った。その数秒後に静かだった自動ドアが、微かな機械音とともに開く。

そこにはふたりの人影。

第2杯？

人影はふたつ共男の人のよう、入口から少し遠めのあたしにも聞えた声でわかった。

会話をしながらC a f eに入ってきて来る。何やら少しもめている様子。

「じゃあ、こつちの問題もちょっと見てくれよ」

「んっこれはココが間違ってるんだよ。これはこの数式じゃない。別の――」

私服を着た男性の説明が中断される。

声をかけたのは入口側に座っていた岡島さん。

「あんたら、うるさいよっ！」

「よっマス姉じゃん。ばんわっ」

軽い口調で制服を身にまとう男の子は岡島さんに気づいたのか挨拶した。

「ばんわじゃない、何をもめてんの？」

岡島さんの問い掛けに答えたのが、もう一人いた男の人。落ち着いた口調と雰囲気で、説明してくれる。

「いや、洋輔が数学の問題なんで間違ってるのか尋ねてくるから、説明したのに……どうも——理解してくれないんですよね」

苦笑して首を傾げている男の人。

「もう少し慎一が分かり易く、説明しろよ」

「あのな、お前がもっと基礎をしっかりと身につけてから訊いてくれよな」

「仕方ないじゃん。自慢じゃねえけどさ、最近なんだぜ——まともに勉強し始めたの」

「——それは確かに自慢じゃないな」

呆れてなのか、岡島さんがため息をつきながら、ふたりの会話に割り込んだ。

「まあ——ほらっなんだ……勉強し始めたのはいい事な訳だから、もう少し基礎をしっかりとすればいいんじゃないかな」

「そんなに基礎基礎って、言うからには慎一教えてくれんだろうな？」

「おっ俺が？」

「そうだよな、あんたが教えてあげりゃいいんじゃない？」

「俺ですか？」

「そそ、あんたさ頭いいんだから」

男の人は頭をかきながら、少し戸惑っている様。

「いや、人に教えるとなると……難しいんですよね」

「じゃあ、後は——」

岡島さんがそう言いながら、こちらに向きなおし、なぜかあたしを見て来た。

完全に油断してたあたしと彼女の目と目が合う。

「っえ、あたしっ？」

「そうだ、董子ちゃんが教えてあげればいいんじゃない？」

突然の流れで驚きを隠しきれないあたし。皆がこっちに注目している。その答えになんて返答してよいのかわからなくて動揺していると、誰かが手を軽く叩いた。

それは岡島さんで何か思いついたのか、あたしの答えをきかない内にまた話出した。

「そういえば、3人は初顔合わせだった？」

「だな。マス姉——誰だよ？」

「ああ、宮野董子ちゃん」

「えっと、今月302号室に引っ越したばかりですがよろしく願います」

あたしが言い終わったのを見計らったか、今度は視線をふたりに移す岡島さん。私服の男の人を見ながら、あたしに紹介してくれる。

第2杯 ？（前書き）

前回の主人公の間違っていた苗字訂正しました。

第2杯？

「男前な方が藤井慎一くん——」

こつちを向いてから私服の男性が、あたしに頭だけで軽く会釈してくれた。

「俺は203号室の住人。こちらこそこれからよろしく」

次は制服の男の子を指さすと、さっきより雑な感じで岡島さんがあたしに紹介してくれる。

「このいかにもあほ面なのが、本田洋輔」

「って、なんで俺だけそんな紹介なんだよっ」

「っん？ 特に意味はない」

「んっだよ、それ」

納得できない感じの顔が不満そうな様子。かと思えば、今度は皆に向けて自信たっぷりな口振りで言う。

「ってか、俺の方が男前じゃなくねっ」

「あんた……それ自分で言ってたら世話ないね」

本田くんは自分の事を一蹴した岡島さんを恨めしそうな顔でみている。

そこへ頷きながら藤井くんがとどめを刺す一言。

「確かに——」

3人の掛け合いにあたしはクスクスと小さく笑う。そんな本田くんは納得できないのか、まだまだ食い下がる模様。

「つてかふたり共、目が腐ってんじゃね？」

岡島さんは顔を横に振りながら、否定。

「腐ってない、腐ってない」

「ちよっ——即答って、マス姉ひどくね」

「——はいはい、それより自己紹介なんだから言っ事あるだろ？」

「ああ、そっか。改めて202号室の本田洋輔。高3、よろしく」

「よろしくね、あたしの1つ下なんだ」

あたしの話から藤井くんが歳を計算したようで、ポツリと口を開く。

「じゃあ、宮野さんは大学1年って事か。俺の1つ下か」

「そそ。だから3人共歳近いから話合っんじゃない？」

「——かな」

ポツリとまた答える藤井くん。

「で、結局何の話してたんだっけ？」

「誰が洋輔に勉強を教えるかって、話ですな」

「ああ、そそ。でどうなの、董子ちゃん？」

「——うーん」

あたしが答えあぐねて漏れた声に、藤井くんは見兼ねてか、もうひと押しとばかりに一言。

「それなら、俺もバイトがなければ、勉強みるし、ね？」

「——あたしがわかる範囲でなら……」

「よかつたじゃん、洋輔」

「まあな。これも日頃の行いがいいからだろ」

冷たい視線の岡島さんがシラッと本田くんへ釘をさす。

「日頃の行いがいいから——じゃなく、董子ちゃん達が優しいからだろ」

岡島さんの言葉にタジタジな様子の本田くんは自分の顔を人差し指でかいている。

「まあ、そうとも言っな」

「じゃあ、俺はそろそろ時間なんで、バイトに行きますね」

「頑張っていつて来い、勤劳学生君」

「じゃあな、慎」

「いつてらっしゃい、藤井くん」

みんなが見ている中、藤井くんはC a f eを出て行った。

第2杯？

隣に立っていた本田洋輔くんはというと、あたしの隣に腰掛けた後、調子よく軽い感じに声をかけてきた。

「とりあえずよろしくっ董子」

「なっ呼び捨て……」

「ん——なんか問題でもあんの？」

「問題ないけど——」

「俺も洋輔でいいし」

「あっ董子ちゃん、あたしもマス姉でいいよ」

「じゃあ、ふたりの事はそう呼ばしてもらっね」

ひと通り喋りつくしたあたし達。

少し間が空いた所に洋輔とは違う男性の声。

「おやおや、お話おわりましたか？」

「だね。やっと落ち着いてコーヒーが飲めそう、マスター」

声の主は大家さん。

マス姉がため息まじりで彼に答えた後、あたしの隣にいる洋輔の方へわかり易く視線を送っている。

「えっ俺のせい？」

こちらを驚き見ている洋輔。そこへあたしもマス姉に習って、ダメ押しの一言を言ってみる。

「あたし達、まだ1杯も飲んでないんだからね」

「董子ちゃんも意外と言うな」

「あたしも言うときは、言いますよ」

左側のマス姉に自信のある態度で答えたあたし。

大家さんはその会話が終わるのを待っていたらしく、スツとコーヒーをあたし達3人の前に並べてくれる。

「じゃあ、今日は3人共にこれでもお出ししようかな」

バニラアイスクリームのような甘い香りが3人の鼻をくすぐっている。

「これ——バニラアイスのおいじゃなくね？」

「うん——バニラの薫りだっ」

「洋輔の言うとおり、甘い香りがコーヒーからしてるなあ」

「だろ？ マス姉」

「わかりましたか、みなさん」

コーヒーをドリップしていた大家さんがこちらをみて満足そうに微笑んでいる。

「これはどんなレシピで作られるんですか？」

3人を代表してあたしが聞くと、ますます得意げな顔をする。顔のしわが深くなった大家さんのくしゃくしゃにした表情がうれしそうにみえる。

「んーそうだね、名前を言うつとすぐにわかりますよ」

「名前にヒントがあるのか」

少し考えた感じのマス姉がつぶやいた。
それに続けて洋輔が大家さんの答えを急かす。

「じゃあ、その名前早く教えてくれよ」

「いいですよ、バニラバターカフェオレです」

「へえ、バターが入ってるんだあ」

関心するあたし、驚きの言葉におもわずため息がまじった。

「みなさん、飲んでみてください」

大家さんのすすめでコーヒーにそれぞれ口をつけた。

口の中には甘い香りとバターの濃くが口いっぱい広がって、無意識の内になり声があたしからはもれていた。

「んーおいしい」

「うん、コーヒーにコクがあってうまいっ」

「うめえーな、これ」

「よかった、気に入って頂けて」

コーヒーを飲んで、ホーっと一息ついて、ゆったりと時間が流れていく感じ。

この瞬間があたし——ものすごく好き。

第2杯 ？（後書き）

バナラバターコーヒー材料（ 1 人分）

インスタントコーヒー 小さじ 1

砂糖 小さじ 2

湯 50 c c

牛乳 100 c c

バター 5 g

バナラエッセンス 2、 3 滴

1

マグカップにインスタントコーヒーと砂糖と湯を入れてよく混ぜ、牛乳を入れて更によく混ぜる。

2

電子レンジの「牛乳」コースで温めてから、バターとバナラエッセンスを入れてかき混ぜて出来上がり。

3

バター 5 g の目安として、「きれてるバター」1 切れが 10 g なので、その半分が 5 g です。

第3杯 タダより高いものはないっ！？

目覚まし時計がけたたましく部屋中に鳴り響く。

目を薄く開けるとカーテン越しから眩しい光が差し込んでくる。

やわらかな春のポカポカ陽気。

寝起きのあたしには当然眩しく、思わずサッと布団にもぐった。

その状態で布団から腕だけを頭上に伸ばす。手探りでピピピッと鳴り続けるやかましい目覚ましを捕まえるため、頭上で数分格闘。

目覚ましに勝利したらしく、部屋があつという間に物音ひとつ聞こえなくなっていた。

静けさに再び眠気が増したあたし、だんだん意識がベットの上で遠のいてゆく――・・・

コーヒークップを顔に近づけて、あたしはコーヒーの芳しい香りをお腹いっぱい鼻と口から吸い込んだ。周りには誰もそれを邪魔する人はいなく、なぜかあたしだけがココにひとりいる状況。それに時の流れがわかる様な物体が一切ないだけに、まるで時間がとまっているかの様。

貸切状態のc a f eで大満足なあたしはひとりコーヒーを愉しむ。

「コーヒーおいしいなあ――ココってホント天国。今日は誰もお店にいないみたいだし――」

独り言を言ったとたん、急にC a f eで過ごしてたはずが、突然真っ白で何も無い空間に。

「なっなんで？ 何がどうなってるの？」

真っ白な空間であたしは独り、アタフタする。何も無い空間を宙に浮かぶ様に漂っていたら、急に足元らへんの空間が観音開きの様に開いて、あたしを真っ黒な世界に引きずり込む。

「ちよつ——待つ」

その瞬間、身体全体に痛みが走る。

「いったあゝゝ！」

痛みで目を覚ますとそこは自分の部屋で、どうやらベットがら寝ぼけて落ちたらしい。

「痛っなんだったの——今の夢」

腰をさすりながらあたしはベッドに片手を置き、立ち上がろうとして、下に顔を向ける。視界に目覚ましい時計が転がっていた。それを足元から拾い上げる。

「んっ……？」

驚きのあまり、目覚ましを思わず2度みした。

「あれ——」

時計が自分の思っていた数字の所に針が指していない模様。

「今って何時なのっ」

誰かに尋ねる訳じゃないけど、意識もなく、その言葉をあたしは口走っていた。慌てて机にある携帯で時間を確認。良からぬ想像がチラっと思い浮かぶ。デジタル時計を見た瞬間、それが現実のものに。

真っ青な顔をして、最低限の身支度をするあたし。慌てたあたしはぐっちゃぐっちゃにパジャマを脱ぎ捨て、服に着替える。

「やばい……電車乗り遅れたら、遅刻間違いなしかも」

身支度の準備が終わるとカバンに荷物をどんどん詰め込む。それが済んだら、今度は玄関の方へ駆け走った。

飛び出す様にドアを開け出て、あたしはドアノブの鍵穴に鍵をさして回す。カチツと閉まる音が鳴ったのと同時にハイツの階段をなりふり構わず駆け下りる。

第3杯？

ハイツの出入口の方へ急ぐあたし。

駆け足で扉に寄って、それを押して開けると、目の前には昨日知り合った洋輔がいた。

彼は制服を着こんでバイクに跨っている。今にも走り出しそうな雰囲気。

バイクのサイドミラーにあたしの姿が映ったのを、洋輔が気が付いたみたいで、声を掛けてきた。

「なんか、慌ただしそうだな？」

フルフェイスのヘルメットを頭から外した洋輔の方へ、思わず駆け寄る。

困り果てていたあたしは洋輔に事情を話してみた。

「そうなの、今日2度寝したみたいで、遅刻かもしれない……」

洋輔はヘルメットで髪の毛のセットが崩れたのを気にしてなのか、サイドミラーで自分の茶色がかった前髪、やや長めの後ろ髪などを直している。気が済んだのか、やっとこちらの方へ向いた。

立派なM字型の前髪をした彼はあたしの顔を見るなり失礼な一言。

「案外、お前ってどんくさい奴だな」

あたしはこんな所でチンタラしている場合じゃない、と彼の嫌味を含んだ言葉に目が覚めた。

「悪かったわね。それより急ぐから、またね」

気分を害したあたしは彼をまともに見ないで、別れの言葉を押し付け、ズンズンと1・5メートル程を歩く。

その時、呼び止める声が。

「あつ、おいトウコ！」

あたしが振り返ると、今の今まで話していた洋輔は何か言いたげにしている。急いでいたけど、その彼の表情を察して応える事にした。

「なに？ ホントに急いでるの」

「しゃーないっ俺が送ってやらなくもないが」

「ホントに？ じゃあ、お願い！」

「ほい、来た。じゃ、後ろに乗れよ」

「うん」

ありがたい洋輔の言葉に甘える事にして、あたしは進んだ道を戻って、また彼のいる場所へ駆け寄る。

「はいよ、これ被れよ」

駆け寄ったあたしに洋輔は自分が持っていたヘルメットじゃなく、別の物を渡してきた。可愛らしいヘルメットを受け取り、それを頭に装着して、彼の後ろに乗り込んだ。

「用意はいいか？」

「うん、いつでも」

「大学ってどこの大学？」

「何？ 聞えな〜い！」

バイクのエンジンを掛ける音とヘルメットが音を吸収してるのか、人の声が聞こえにくい。あたしはもう一度訊き返した。

「だから、大学どこだよっ！」

「——大学ね。大学は桜花女子短大っ」

普通のトーンで話を使用もんなら、バイク音のせいで、なかなか会話が進まない。

そんな事もあって、少し大きめな声で会話しているつもりだったけど、ふたりの近くを通行している学生さん、OLさん、その他大勢が迷惑そうな感じで、チラッとこちらを見ている。

その嫌な感じの視線に気付いたあたしは、恥ずかしくてヘルメットの顔が、真っ赤っかになるのだった。

第3杯？

あたしと違って、洋輔は何も感じていないのか、気づいていないのか、相変わらずの大きな声で応答してくれる。

「わかった、桜花だな」

「うん」

「よっしゃ」

気合いの入った洋輔の掛け声と共に、バイクにあたしを乗せて、走り出す。

いくつかの信号を通り過ぎた時、フルフェイスのヘルメットが振り向いた。ヘルメットのガラス部分が開いて、何かあたしに言うてくる。

「あのさ、さつきからメットがぶつかりまくって、痛いんだけど」
「えっ？ 何！？」

信号は赤。なので、隣に車も止まって、エンジン音の合唱がうるさい。相変わらず、話が聞き取りづらい。

信号が赤の内に、何か伝えたいのか、更に洋輔の声が大きくなる。

「だから、メットだよ。メットがお互いにぶつかって、痛いってんの！」

「ご、ごめ〜ん。ヘルメットって装着すると、こうなる物だと思って」

「な訳、あるかいっ」

「マジ、ごめんって。あたし、バイク乗ったの初めてだから」

「だったら、俺のメットから頭ズラして、乗れば、ガンガンしな

くなるから」

「わかった、そうする〜！」

洋輔に言われて、頭を彼のヘルメットから、ズラした。言う通りにしたら、頭同士がぶつからなくなつて、快適なバイクの乗り心地になる。

しばらく、短大の方向にバイクで走行する。信号が赤になると、短大への道を時々尋ねてくる洋輔。

学校に到着するまで、それを時々繰り返すのだった。

バイクから見える景色が短大近くの風景に確実に変化して行く。気が付けば、短大前に到着していた。

バイクのブレーキ音が鳴つて、バイクが安全に止まる。

メットを脱いだ洋輔が、短大の名前が彫られてあるプレートを指差して言う。

「ここだろ？」

会話する為に、自分のかぶっていたメットをあたしも脱いだ。

「そう、ここ。サンキュー」

「まあな。俺も役に立つだろ？」

「うん、超助かったかな」

「だろっ」

会話が終わるとあたしはバイクからすぐに降りた。

ずっと、バイクに乗っている間中、時間が気になっていたあたし。携帯を取り出して、待ち受けのデジタル時計を見る。

時間は講義の始まる１０分前を刻んでいた。

余裕の時間に到着した事で、ホッとあたしは胸をなで下す。手に持っていたヘルメットを元の持ち主に返した。

「ホント、ありがとう」

「ああ」

あたしからメットを受け取った洋輔は、元の場所にそれを取り付ける。

「あれっそう言えば、洋輔、高校は？」

「あつ、俺はいいのいいの。気にすんなって」

「でも……今からじゃ遅刻するんじゃない？」

「いつもの事だからな」

笑って、大した事ない様に言う洋輔。彼は手に持っていたメットをかぶり直す。

「んじゃ、俺、もう行くわっ」

「うん」

再びバイクのエンジンを掛ける洋輔に頭を下げて見送るあたし。彼の姿はあっという間に見えなくなった。

第3杯 ？（前書き）

一時停止していた小説を再開できるようになりました。
ゆっくり活動していくので見守っていただければです。

2
4

c h o c o 2 0 1 1 / 5 /

第3杯？

洋輔の送迎で、見事講義へと間に合ったあたしは、午前中すべての講義を済ませて今は食堂にいる。

食堂は一昨年くらいから一般開放して、それに伴って食堂の内装はとってもおしゃれな感じになっているのだった。

外から一般の人でも食べに来られるので、ちらほら一般人の人が、学生にまじってたりも。

今も食堂はすごく大事に使用されていて、みんなのお気に入りスポットになっている。

あたしは時々、外のお店にいるのか、と錯覚する事があって、たくさんの学生を見ると、現実に戻される事がしばしばで、今はちょうど、そのお昼の休憩タイム。

ここの女子学生が、食堂で思い思い過ごす姿を、多く見られる時間。教科書片手に小難しいそうな様子の子や友人と会話を楽しんで食事している姿。

あたしはと言うと、今日は友達とまだ一度も出会っていない。なので、独りさびしくご飯を味わう事に。

今日の食事は独り決定。でも、目の前にはお昼の至福が。

可愛らしいテーブルクロスが掛けてあるテーブル上に、お昼のオムライスとペットボトルのお茶。タンポポの様に卵が花開き、半熟の卵の下にはバターライス、上のソースは大好きなハヤシソース。あたしがとってもおいしそうっと思ひ、大口を開けて、スプーンを飲み込もうとした時、寸止めする声。

「あゝトウコッ！」

渋々その口に入れかけたスプーンを、いったん口から離して、声

のする方を恨めしく振り返ったあたし。

そこにはやや長身で、髪は毛先に緩やかなパーマをつけたショートボブの女子が、なにやら、とってもニヤついた様子。

「なんだ、弥生か」

「あたしじゃ悪い？ 隣座るよ」

「うん、どうぞ」

自分の荷物を置いている椅子から、弥生のために他の場所へ荷物を移動。

開いた場所へ、彼女は手にあるプレートをテーブルに置き、次に肩にかけた鞆を置いてから、あたしの隣へ腰掛けてくる。

「なんか、ニヤついてない？」

「朝さ、学生服来た男子といなかった？」

「ん、いたけど。なんで？」

スプーンに乗っているオムライスが食べてと言わんばかりに、おいしそうな匂いで、会話中のあたしを誘ってくる。その誘惑に、ついつい負けてしまった。食べ物にうえている自分の口へと、ワンस्पーンオムライスを運んだ。

「あの入って、トウコの、もしかして——年下の彼氏？」

やっとこさ、口に運んだオムライスの大半が味わう間もなく、口から消える。

「ンフツ——」

テーブルの上へ四方八方に、飛び散る白や黄色い物体たちを拾い

ながらも、しっかりと質問の返答をかえす、あたし。

「ちがつちがうよ。弥生が変な事言うから、口の出しちゃったじゃん、もう」

「汚ない、トウコが話てる時に、口に入れるからっ！」

ひとつひとつ拾って、持っていたティッシュ取り出して、そこに集めたものを泣く泣く包む。そんな忙しなく、テーブルを片付けるあたしに、何か言いた気な視線で見ている弥生。

第3杯 ？（後書き）

今回お話も少し続く予定かな。いつもより長くなるかもですがお付き合いお願いします。

第3杯？

「またまたあゝ。トボけちゃって」

「別にトボけてないんだけど……」

「ふうん、んじゃ、アプローチしてみよっかな」

「いいんじゃないの、別に」

「もうっ！ 全然おもしろくないっ」

「何が？」

「その反応が、つまんないの」

「そんな事、言われても——ね」

不服そうな弥生はさっきのニヤついていた表情をガラリと変え、つまんなさそうにしている。彼女は何を期待しているのか、あたしにはさっぱりわからないんだけど。

気を取り直した弥生はランチに手をつけようとして、口に運んだお箸をポロリと落とした。

「今度は何？ どうかしたの？」

「あ……あれ——」

「——っん？」

弥生が指差す方を振り返るあたし。

後方でざわつく女子大生達。

ガラス越しに外を見ると、そこには、朝別れたはずの洋輔がいたのだった。

「……なんで、いるの？」

あたしは食堂を出た先の目の前にいる洋輔に、いつの間にか、問

にかけていた。

洋輔は頭をポリポリかきながら、あたしに言う。

「あのさ、今日講義終わったら、飯食いにいかね？」

「急になんで？ 食事に行かないといけないの？」

周りの女子大生達があたしたちを遠目に見ながら、ヒソヒソ話をしている。時々こちらを見てはキャツキャツしている。その事が少し気にはなるけど、そのまま会話を続けた。

「俺、今月ピンチなんだよ。今日誰のおかげで遅刻しねえで、済んだのかな？」

「な、何っはじめっから、それが狙いだっただの……もしかして？」

「まあ、否定はしない」

「呆れる——もうっ」

「んじゃ、嫌でも迎えにくるからな、逃げんなよ」

「わかったよ、今日だけだからね。あたしだってお金ないんだから」

「サンキュー、じゃあな」

言いたい事だけ言って、洋輔は満足げにキャンバスの出口に歩いていくのだった。

いつまでもあたしはその姿をポカンつと見ていた——誰かに声を掛けられるまでは。

「やっぱ、気があるんじゃないの？」

「そんなんじゃないって……って」

あたしがその問い掛けに反射的に答えてから、背後を確認すると、そこに何故かいるはずのない弥生が立っていた。

「弥生——いつの間に？」

「ん？ さあ、いつの間にだろうね」

「ところで——会話聞いてたの？」

「えっいい——まあ、そうなるのか……な？」

あたしを誤魔化そうと、首を傾げながら曖昧な態度をとる彼女。

「素直に聞いてた、で——もう、いいよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて。しっかり聞いてましたデートのお誘いを」

ちゃっかり事実を認める弥生に、あたしは呆れながらも誤解を解くのだった。

「だあくかくらあ、そんなんじゃないってば！」

第4杯 今時の高校生は……

色々昼休憩にあつたものの、すべての受ける講義が終わり、あたしは机の上に開いていた筆記用具たちを片付ける。

「さてと、約束通り待つとしますか」

「おっファーストデートに行かれますか？」

隣に座っている弥生が、あたしを見上げてから茶化す様に言った。

「だから、なんでそうなるかなつも」

「そんなムキに否定しなくてもいいじゃん」

「別にムキにはなつてないよ」

「そっ？」

「そゝなの」

「はいはい。んじゃ、行つてくれば？」

「まあ、とりあえず行つてこようかな」

会話を終えたあたしは講義室を出た足で、洋輔が待っている場所へ移動する。

携帯の音が鳴り響く、それはあたしがお気に入りの歌手の着うた。カバンから探りながら携帯を取り出して、画面をみる。メール受信が1件。

「んっ 弥生からね」

メールを開きみると、そこにはこんな事が書いてあった。

「期待してる訳じゃないけど、土産話後で聞かせてね（^^）Vっ

て、もう」

負けじにあたしもメールを返す。

「期待には応えないし、もし、何かあったとしても言わない（><）
って、起こるわけないしね」

弥生の茶化したメールに返信を終えて、そのままキャンバスから
あたしは目的地まで歩くのだった。

正門入口付近に立って、目の前の道路を眺めて待つ事、15分。
幾度も車やバイクなどがあたしをどんどんスドウリして行く。し
ばらく、そんな状況が続いた。

さすがに同じ風景を眺めてるのも、いい加減飽きてきた頃、待ち
人がバイクを走らせてこちらに来る様子が、見えた。

「ようっ待たせたな」

メットの前にある透明な部分を上にあげて、洋輔がバイクに跨っ
た姿勢のまま言った。

「結構待ったよ、ホントに。連絡くらいしてくれれば——」

「確か——俺、トウコの携帯とか聞いてなくね？」

「あれ、そうだったっけかな？」

「ああ、そつだよ。とりあえず、バイク乗れよ」

「あ、うん」

朝のメットをあたしが頭に装着したのを見計らって、洋輔はバイ
クにエンジンを掛けた。次々に移り変わる風景や風を感じながら、
朝とは違い今度は彼が主導権を握っている。

あたしは目的地に到着するまで、何も指示もしなくていいから、
楽。ただ大人しく座っているだけでいい。
バイクは何事もなく目的地に着いた模様。

第4杯？

洋輔がバイクを止め、エンジンを切る。こちらに振り返った彼はメットを外して、あたしに言う。

「着いたぞ」

「じゃあ、降りるね」

「んっああ」

洋輔からバイクを降りるのに了解を得て、あたしはメットを彼に返す。いつもの場所にメットをしまった彼が駐車を指差して言う。

「俺コイツを置きに行かねえと」

「そうだね。じゃあココで待ってたらいいよね？」

「ああ」

同じ様にバイクから降りた洋輔はエンジンを切って駐輪場へ。

あたしは手押し車の様にバイクを押して歩く姿を見送って、目の前にある建物を観察し始める。

建物の下は駐車場と駐輪場があつて、そこから建物の入口に続く階段。そんなどこにでもあるファミレス。

外壁にはおすすめのメニューの垂れ幕の様なものが吊るされている。それを見ながら、どのメニューもおおいしそうだな、と目移りしていた。そこへ洋輔が声を掛けてくる。

「おい、入るぞ」

「うん」

戻ってきた洋輔にうながされ、あたしたちはファミレスに入る。

「いらつしゃいませ。大人2名様ですか？」

「いや、中に連れがいるから」

「お連れ様ですね。どうぞ中へ」

店員が軽く会釈してから、店内を腕だけで案内する。その前を何事もなしに横切ろうとする洋輔に、あたしは疑問をぶつけてみた。

「他に誰かいるの？」

「えっ言つてなかったっけ、か」

「うん。何も聞いてない」

「……細かい事、気にするタイプ？」

「ん——時と場合にようるかな」

白々しい会話を交わして店内を進むあたしたちに、窓際の奥の4人用テーブルが並んでるところから、誰かの声が聞こえる。

「洋ちゃん、こっちこっち」

あたしの視線の先にはバリバリのギャル系の女子高生が、顔を覗かせていた。ガラクタのロボットの様に顔を洋輔の方に向ける。

「てかつ誰？」

「んっ？俺のかわいい彼女に決まってるじゃん」

また、彼女の方に視界を向きなおして、冷静にあたしは状況を把握しようとする。

「ああ、洋輔の彼女ね……って、そうじゃなくて」

「あっ？なんか問題でもあんのか？」

「ない訳ないでしょーがつ」

彼女に愛想良く手を振っている洋輔に、怒りに似た感情が湧くのだった。

「でっ何が？」

あたしの反応とは裏腹に洋輔の態度は悪びれる事もなく、とぼけるでもなく、なんとも鈍い反応。その上、全然問題にも気づかない様子。

第4杯？

「だから、まさか彼女もごちそうになる気？」

「あつたりめーじゃんか」

まるで、当たり前のように洋輔は答えたが、この態度を見る限り、まだ、あたしの財布事情を把握できてないらしい。目の前の後景に、思わず自分の額を抱える。

「まあ、細かい事は気にすんなって」

「気にするでしょーがっ」

「そう、怒るなって。俺、今腹減りすぎてよっ死にそうなわけよ」
「ったく、とりあえず座ればいいんでしょっ」

文句を言いながらも、洋輔の彼女が待つテーブルへ。彼は彼女の隣に、あたしはテーブルを挟んだ向かい側のソファーにそれぞれ座る。

「わりいな、待たせて。どっかの誰かが、ごねって——」

洋輔が話終わらない内に、誤解のないように、あたしは彼の言葉に割り込む。

「誰がごねったって？」

「んーなんか、ふたりとも、険悪なカンジイ？」

気が抜けるような軽い感じの声と、それに語尾の最後が上がるイントネーション。そんな軽い感じの口調で言葉を発したのは、洋輔じゃなく、彼の彼女。大人の対応を努める為に下手な愛想笑いで、

その場つくろうあたし。

「そういう訳じゃないんだけどね、予定じゃおごるのはひとりと思つてたから」

「おねえさん、ミズの事なら、ぜんぜん気にしないでいいのにい」

おねえさんという言葉に、全くシツクリ来ないあたしは引きつった顔を苦笑いでなんとかごまかす。

「遠慮すんなつて、ミズ」

「洋ちゃんがそう言うなら、食べちゃおっかなつミズも」

「コラコラ、そこっ人の話聞いてたわけ？」

「大丈夫。おねえさんつミズはあ小食だから」

「いや、だから——ね」

会話を拒むかの様に突如ピンポンと、あのベルの呼び出し音。話を続けようとした矢先、あたしたちのテーブルに注文を受けようと、既に店員さんが待機していた。いつもなら喜ぶはずだけど、今のあたしには素直にそうできそうにもない。

とまどうがそれでも店員さんの手前、文句いう訳にもいかないので、一応注文する事に。メニューのソフトドリンクが数種類並んだ写真を指差す。

「えっと、じゃっこれで」

店員さんはあたしの指差した場所を一度見て、こちらに視線を戻してから微笑えんだ。

「ドリンクバーおひとつですね」

注文の確認を取ると、店員さんは手元の機械へ料理を入力。
続いてその様子を見ていた洋輔が、メニューの商品をあちこち指
差し注文する。その動作や口調にはなんの迷いもない模様。

第4杯？

「んじゃー俺はね、腹減ってるし、これとこれとこれがいいな」
「そちらでしたら、セットメニューでご用意できますが？」

洋輔の注文に反応した店員さんが、すかさず彼にお得なセットメニューをおススメ。

「セットあるなら、それで」

「かしこまりました」

「ミスは？ 注文決まったのか？」

「ううん、まだなの。何がいいかな？」

「好きなもん、頼めばいいんじゃない？」

「じゃっ洋ちゃんと一緒にっ」

「かしこまりました、それではご注文を繰り返しま——」

店員さんが確認を取っている間に、コソコソと鞆から自分の財布を取り出して、お金の勘定をするあたし。

頭の中の計算を終えて、財布から視線を元に戻した。

目の前はガランとした空間だけがあり、見事に向こうの端まで見通せる。

そして、そこにいるはずだった人の姿がない。どうやら夢中で計算していたあたしの耳には、いつの間にか店員さんの声が、聞えなくなっていた模様。

キョロキョロと店員さんの姿を探しながら、状況を把握するために洋輔へ問いかけた。

「あれっ、店員さんは？」

「もう、向こうに行っただけど、返事ならしといたよ」

「あ——そう、ありがとう」
「どういたしまして」

満面の笑みで洋輔が得意気に答えたのを最後に、あたしとの会話がなくなるのだった。

そこに洋輔の隣に座る彼女がイジケルような口調で、彼に問い詰め始めた。

「洋ちゃん、最近忙しいの？」

「なんで？」

「だってえ、なかなかデエトしてくれないんだもんっ」

「ああ、それはミズとの将来を考えてで、俺は今大学行くための勉強してるんだぜ」

「その話は聞いたけど、ミズすごく寂しいのお」

彼女は洋輔の服を細くきれいに手入れしている指で少しつまんで、自分の方へ彼をグイグイと寄せる。

引き寄せられた洋輔はなにやら彼女の耳元で囁く。彼の一言で、ふたりの空気が変わったのか、ラブラブなご様子。

食事が運ばれてくるまでの辛抱だ、とふたりのラブラブっぷりを横目に何度も自分へ言い聞かせるあたしの瞳に、注文した商品を引き連れた店員さんの姿が。

今日は特別その姿が輝いて映るのだった。

到着した店員さんが運んできた料理をそれぞれの目の前に置くと、テーブルいっぱいに美味しそうな香りが広がる。

「ご注文は以上でおそろいでしょうか？」

「はい」

店員さんが白い紙を透明の筒の様な置物の真ん中に紙を差し込む。軽く会釈して去っていった。その間中も彼らは何も気にせず、ふたりだけの世界。

—— いろんな意味でお腹いっぱいあたしはうんざりしていた ——

—— 水分で胃袋はチャポンチャポン。目の前のバカツプルのせいで、今にでもお腹がはち切れそうだった。

理由はイチャイチャする洋輔たちを暖かく見守るスキルなんて持ち合わせていなかったから。飲み物を一気に飲んでは、その度にドリンクバーへ何度も足を運び、往復する始末。

ふたりはすっかりあたしの存在を忘れているのか、それとも、今の高校生は公衆の面前で恥知らずな行為を、遠慮なしにやってくれる程、動物的本能が抑えられないお猿さんなのか。

第5杯 董子ちゃんらしい（前書き）

急な質問からタイトル上記に変更しました。

30 choco

9 / 1

18 :

第5杯 董子ちゃんらしい

「ごちそうさん」

食事が終わり、ファミリーストランから出るあたし達。

はじめに話し出したのは、ご機嫌なそうな声の洋輔。それに続いて言葉を返すけど、適当な感じのトーンで答えるあたし。

「う、うん」

お会計が済んだばかりの自分の財布の中を再確認。あたしはすっかり軽くて薄くなったのをヒシヒシと実感するのだった。

あたしがお財布をみて嘆いている時、ふたりはまたラブラブモードに突入したみたいで。

「洋ちゃん、おいしかったね」

「そうだな、うまかったな」

「今度はふたりだけでココに来ようねっ」

「来月、バイト代でも入ったら、行くか」

「うん、楽しみにしてるね」

「おお」

送ってもらうつもりで、ふたりのやり取りを早く終わらないかな、と思って聞いていたあたしは、会話が終わるのをひたすら待った。

「んじゃ、俺らココで」

「はあはいっ?」

思わずあたしはキョトンとする。洋輔が何を言っているのか、理

解できない。

それを察してなのか、あたしの態度に拍子抜けしたのか、ポリポリと顔を指でかきながら洋輔が言っのだった。

「いや——俺らさ、バイクで帰るし」

「まさか、あたしをココに置いてくつもりとか？」

「ああ、そのつもり」

「っっええ！」

声にならない声が、気づくと、あたしから飛び出していた。その声がつざいらしく、不機嫌そうな顔になる洋輔。

「何？ 子供じゃあるまいし、独りで帰れんじゃね？」

「まあ……それはそうだけど、送ってくれたっていいでしょ？」

「なんで？ 俺、彼女送んないと」

呆れたあたしはそれ以上、会話する気にもなれず、彼らを見送る事を選んだ。

「おねえさん、ごちそうさまでしたあ」

洋輔のバイクの後ろに、ガッチリと彼の腰に細い腕を回した彼の彼女が、顔だけを少し下げて言った。

両頬にくぼをたずさえた彼女に目を向けて、答えを返すあたし。

「どういたしまして。それと歳ひとつしか変わらないし、名前かなんかで読んでくれれば」

「ん——」

あたしの言葉に何かを思い出そうと彼女が考え込んだ様子。少し

の間が経ってから、誰ともなく尋ねる彼女。

「名前って、まだ教えてもらってないよ？」

バイクにまたがっているだけだった洋輔が、あたしと彼女の会話に急に口を出して来るのだった。メットをかぶろうとした手を止めて、素朴な彼女の疑問に彼は答える。

「ミズ、彼女は宮野董子で、俺とハイツが一緒」

「ふーん、同じ住民さん仲間だったの」

「そういう事。何度か会うかもね、あたし達」

「だね。じゃあ、下の名前でトウコちゃんって呼ぶね。ミズはあ、橘瑞奈って言うのぉ」

「タチバナ ミズナちゃんね、よろしく」

第5杯？

「って言う感じで、そのあとは歩きで帰って、ホントに今もクタクタですよ」

あたしはコーヒーの香ばしい匂いが立ち込めるカウンターで、昨日起きた出来事をマス姉に身振り手振りで話をした。話が終わる頃には、またドツと疲れ切ってしまった。

「あつはつは、そりゃ、傑作だ」

「もうっ傑作じゃないよ、マスねえ」

「にしても、迷惑な奴だな、相変わらず洋輔は」

「ホント、迷惑ですよ。計算外のお金いっぱい使ったし」

あたしがヨタヨタとカウンターから、身体をなんとか起すのを見ていた大家さんが、見兼ねてなのか、マス姉へ一言。

「岡島さん、董子ちゃんを笑うなんて、かわいそうですよ」

「マスターは優しいね。特に董子ちゃんには」

「そんな事ないですよ、大家さんはみんなに優しいんです」

「そっ？ まあそうだな」

最後にそう言って、マス姉がフッと目を細める。黙って目の前にあるコーヒーを飲み始めたのだった。

あたし達の話が終わると、大家さんが心配そうにまた声を掛けてくれる。

「それじゃあ、董子ちゃんは昨日お金使って大変じゃないのかね？」

「そうですね、仕送りも来月にならないとないですし——」

「これから、うちで朝ごはん食べて行きなさい。朝食べないと元気でないよ」

「でも、そんな事できないですよ。大家さんにご迷惑かけられませんし」

「でもね、ココのハイツ住人が迷惑かけたようだし、そうさせておくれよ」

少し間、考える。あたしの頭の中では、勉強で計算するよりも早く、お金を計算していた。

そして、出した答えは――。

「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらいます」

コーヒーの焙煎の手を止め、大家さんは改めてこちらを見た。目尻にシワを少しずつつ刻みながら、頭を上下させて言う。

「そうだよ、そうなさい」

「ご迷惑だと思いますが」

「そんな事はないよ」

答えた後、大家さんは手を再び動かす。黙々と真剣な眼差しで、鍋の作業に集中し始めた。

「まゝよかったじゃない、董子ちゃん」

「ホント、そう思います」

「飯でもおごってくれる彼氏、2人や3人いないの？」

「いれば、昨日の時点で既に頼ってます」

「そら、そうか」

あたしの即答にマス姉は、小さく笑った。

「董子ちゃんは好きな人いる？」

手元のコーヒーを飲み、ポツリと言う。彼女の瞳は真剣そのもの。あたしはその瞳に見つめられて、なんとなくたじろぐのだった。

第5杯

「ど、どうしたんですか、急に？」

あたしが次の言葉を発するより先に、マス姉が視線をあたしから手に持ったカップに移す。

「んーなんとなくさ」

マス姉の元気のない声が少し気になったけど、聞かれた事にあたりは答え返した。

「今はいないですし、あたしの大学女子だけだし」

「ふうん、出会いがないのか」

「まっそんな感じ———ですね」

「じゃあさ、あのふたりはどうよ？」

「えっ———あのふたりって？」

「この前紹介したコ。藤井慎一さんと洋輔の事」

「うーん、あんまり藤井くんの事知らないし、洋輔に限ってはなし……」

間を少しおいてから、あたしは尚もとどめを刺すかの様に言い切る。

「ないっつうん。彼女いるし———ないですね」

言い切った後、何度もうなずくあたしに、納得できてなさそうな顔のマス姉。

「んじゃ、董子ちゃん是谁かのものだど、諦めるんだ?」

ちよつとの間考えてから、続きを答えるあたし。

「うゝん、諦めるって訳じゃないけど、

彼があたしの方を見してくれるまで待ちます。

何より、彼女と自分の間で悩んでる姿は辛いし、

そんな中途半端な付き合いもあたしは嫌です。

それにどちらを選べないって事は――その人は、
あたしじゃなきゃダメっていう事じゃない気がする」

自分の考えを言い切ってから、あたしは沈黙しているマス姉の様子を伺う。

「つて、あたし真面目に答えすぎちゃったかな?」

「んゝなんかさ、董子ちゃんらしいな」

マス姉はまたカップを手に取り、コーヒーを一口飲んだ。ゆっくりと味わっていたコーヒーをちょうど飲み干し、カラッポのカップを見つめたまま、一息つくと皿の上にカップを置く。

「さてと、そろそろ出勤するか」

「マス姉、今から出勤なんだ?」

「うん、まゝね。休日出勤って所かな」

「社会人は大変なんだね」

「そついう事。じゃ、マスターごちそう様」

大家さんは仕事している手を止め、声が聞こえる方に顔を向ける。
あたしの隣にいるマス姉へ優しく微笑んだ。

「岡島さん、いつてらっしやい」

なぜか緊張気味で少しこわばった様な顔をするマス姉。大家さんの声を聞いてか、表情が和らいだ。

今まで強気な姿しか知らなかったあたしの目には、少し弱々しい感じに映る。彼女は出していた自分の物を鞆に詰め、カウンターに手をつき腰をあげた。

「それじゃ、いつてきます」

お店の出口にマス姉はゆっくり歩いて行くのだった。

第5杯？

あたしはマス姉と会話しながら、待ち人を待とうと、思っていたが、その肝心な相手は休日出勤。話相手がいなくなつて、時間を持て余す事に。

「おや、董子ちゃんは今日出掛けないのかい？」

「はい、あたしは昨日に続いて、今日も洋輔の子守りです」

「そうだったのかい」

「はい。でも、今日は藤井くんも一緒なので、少し気は楽ですけど」

あたしは少し苦笑を含めて、大家さんに答えた。

「そう、それはよかったじゃないかい」

「はい」

「じゃあ、1日ここにいろんだね？」

「はい、そうなりますね。洋輔に勉強教える約束になっているので」

「そうかい——それなら、みなさんで勉強会なさるのなら、ココで食事等用意しようかね？」

「でも、ご迷惑かからないでしょうか？」

「大丈夫、心配はないよ。しっかり洋輔くんには勉強してもらわないと」

「ですね。後、あそこのテーブル占領してもかまわないでしょうか？」

大家さんも洋輔に対し、そう感じていたのかと、思ったらおかしかった。それでも笑うのを我慢して、あたしはカウンターの斜め後ろにあるテーブルを指す。

「ああ、かまわないよ。もし——混みそうになった場合は、図書館にでも移動してもらおうかね」

「じゃあ、それまでお言葉に甘えさせてもらいます」

「ああ、そうしておくれ」

あたしとの会話が終わるとまた大家さんは、自分のしていた仕事の続きをやり始めた。また会話相手がなくなった為、あたしは自分の鞆に手を伸ばす。

あらかじめ、自分の鞆の中には時間つぶしの品々を、こんな時の為に仕込んでおいた。

あたしはどれにしようかと迷ういながら中を探る。一度手に持った物をマジマジ見てから手から離し、また違う物を手に取り、悩む事数十分。なかなかどれがいいか決められずにいた。

ずつと鞆とにらめっこしていたあたしの目の前に、スウーッとコーヒーを持った手が現れる。視線を鞆から外して、手が現れた方に移した。

そこには目を細めて優しく微笑む大家さん。

「はい、これ」

大家さんがそう言って、カウンターに置いた白いコーヒーカップを指で指す。

「あっありがとうございます」

「まだ、ふたりとも来られないようだね」

「ですね。もう約束の時間なんだけど」

「まあ、これでも飲んで待つといいよ」

「はい——」

第5杯？

返事をしてから、あたしはカップを自分の方に引き取る。普通のコーヒーかと思って見ると、生クリームが乗ったコーヒー。見た目からウインナーコーヒーだとわかり、得意げにあたしは大家さんに声を掛ける。

「これなら、飲んだことあります、ウインナーコーヒーですよね」
「ああ、そうだね。オーストリア、ウィーン生まれのコーヒーだね」

相槌をうつてくれた大家さんは、続けて、詳しいお話をしてくれる。

「今はウインナーコーヒーとも呼ばれているけど、昔はアイン・シユペンナーという名称だったんだよ。

その名前は【１頭だて馬車の御者】の意味をもっていてね、この言葉通り、客を待つ御者が親しんで飲んでいた飲み物と言われているんだよ」

「ちゃんとコーヒーの名前にも意味があるなんて、奥が深いんですね」

「ああ、そうなんだよ。待つって所は今の童子ちゃんと同じだね」

クスッと笑う大家さん。

「———ですね」

「本当にふたりとも来られないようだね」

「もしかしたら、藤井くんはバイト長引いているのかもしれない」

「そうかい、洋輔くんは何か用事でもあるのかい？」

「いえ、そんな事は言ってなかったから……洋輔は寝坊かな」

「それじゃ、おこしにでも行こうかね」

「あつ携帯教えてもらったので、電話してみます」

「ふむ——それでダメなら、おこしに行ってみようかね？」

大家さんはどうもあたしに気を使ってくれてるみたい。

なぜかと言うと、このハイツは階層によって男女の入居が分けられていて、女性が男性の入居している2階には入られないようになっているからだ。

電話が通じなかったら、あたしの待ちぼうけがまだまだ続く事が決定だけど。それでもひとり暮らしのあたしにとって、安心できるシステム。

時には不便だけど――

「その時は、大家さんお願いします」

「それなら、早く電話をかけておあげなさい」

「はい。それじゃ、電話してみます」

携帯片手にあたしはそう言ってから、Cafe出入口から出る。自動ドアが開くと少し曇った感じの空が、ハイツの出入口のガラスのドアから見えた。

自動ドアが開かない場所に少し移動するあたし。

誰の邪魔にもならない場所で、携帯のボタンを押しかけた時、ハイツのドアが開いた。

そこから入ってきた男性と、あたしは目と目が合うのだった。

息が荒い男性とあたしは、同時にお互いを指差して声を漏らす。

「あつ」

第5杯 ？（後書き）

【1杯分】

コーヒー粉／深煎り12g

生クリーム／半立て30cc（大さじ2杯）

コーヒーシュガー20g（小さじ5杯）

【作り方】

（1）101サイズのドリッパーとサーバーを使用し、コーヒーを120cc抽出します。

（2）温めたコーヒーカップにコーヒーシュガーを たっぷりと入れます。

（3）（2）に（1）のコーヒーを注ぎます。

（4）（3）に半立ての生クリームを浮かべます。

第6杯 勉強とコーヒーと雨

息が上がった男性は、この前紹介された藤井慎一くん。
あたしに話しかける為か、息を整えているようだ。

「ちょ———ちょっと待ってね」

肩を上下さして言う藤井くんを見て、あたしはウンウンと声を出さないで頷いてみせた。それでも彼はとっても気にしている様子みたいで、身体の前で手を合わせて謝ってくれる。

「ごめんね、遅くなって」

「あついえ。大丈夫ですよ」

首を左右に振ってから、あたしは優しく答えた。

「そう。洋輔も中にいるの？」

「ああ、いないです」

「なんでだい？ 今日勉強する日だったんじゃない？」

「そうなんです、寝てるっぽくて」

「なんだ、そうなのか」

「……はい」

藤井くんに応えた後、あたしが悪い訳じゃないんだけど、どうしてか、彼に悪いような気分になった。

「ずっと、洋輔と俺の事待っててくれたの？」

何も言わずにあたしが頷いたら、改めて藤井くんは汗をぬぐって、

申し訳なさそうに言う。

「ホントに悪かったね、洋輔に連絡とかすればよかったんだけど、携帯忘れて」

「気にしないで下さい。張本人、グースカと寝てますから」

「そうみたいだね」

ホッとしたのか藤井くんがハニカンで顔で、照れた様子を見せる。そんな彼を見てあたしはクスクスと笑った。

「じゃ、洋輔呼びに行つてこようか？」

「はい、お願いします」

「うん」

藤井くんは目の前を横切つて、あたしの前にあるドアを開け、洋輔の部屋に向かう。彼を見送ったあたしはまたC a f eに戻る事にする。

自動ドアが開いたと同時に店内のカウンターにいる大家さんが声を掛けてきた。

「起こせたかい？」

「今そこで藤井くんに会ったので、洋輔の事は彼に頼んじやいました」

ペロつと舌を口から少しだけ出しあたしは、大家さんに笑うと、心なしかホつとしたような表情の大家さん。

「そうかい、それはよかったじゃないかい」

「はい、じゃ空いてる席お借りしますね」

「ああ、どうぞ」

あたしは元居たカウンターじゃなく、歩道や道路が見える窓際にある4人席のテーブルに座る事にした。

席についたあたしは勉強セットを取り出し、洋輔たちが来るまで、高校で習ってた事を必死に思い出そうと頑張るのだった。

自動ドアの方から、かったるそうな男性の声がある。

第6杯？

Cafeに入ってきてても会話が止まる事もなく、こちらに来るよ
うだ。

「もう少し寝かしてくれりゃいいのに」

「あんな、お前いい加減にしろよ」

「んな、怒んなくてもいいじゃなくね？」

「普通は怒るだろ」

寝癖のついた頭をボリボリかく洋輔に、呆れた様子の藤井くん。

「とりあえず、宮野さんだったかな、謝るんだぞ」

「ヘイヘイ、謝りますよっと、その前に」

こちらに向かっていたのを急に進路を変えて、洋輔はカウンター
のそばへ。

「コーヒーマグでお願いします」

「いらっしやい、洋輔くん、慎一くん。コーヒーマグだね」

「同じので、俺もお願いします」

「はい、かしこまりました」

用が済んだのか、ふたりはまたこちらに向かってくる。

洋輔はバツの悪そうにあたしへ話しかけてきた。

「——董子」

「っん？」

「なんだ、その——待たせて悪かったな」

「ホントおゝにそう思ってるの？」

「ああ、まあな」

「一応、洋輔も反省してるから、許してやって」

「まあ、いいけど。とりあえずふたりとも席に座って」

あたしがそう言うと、ふたりは席に腰掛ける。あたしの隣には洋輔、彼の前には藤井くんと言った形に。ふたりがそれぞれ、鞆から筆記道具を出していると、男性の声。

「ハイ」

その声にあたしたちが振り向くと大家さんじゃなく、ガテン系の服が似合いそうな雰囲気男性がいた。一見いかつそうな感じ。坊主よりかは少し髪が長めで、さっぱりとした髪型の30代前後の男性がカップをテーブルに置くのだった。

「哲太さん、ありがとう」

藤井くんが声を掛けたのに対して、短髪の男性は小さくうなずいた。次に洋輔の前にもカップを置く。

「サンキュー哲太さん」

また、小さく笑っただけで、何も言わずにカウンターに戻って行く男性。彼が戻ったのを確認してから、あたしは口を開いた。

「あの人ってアルバイトさんですか？」

「ううん、大家さんの息子さんだよ」

「あれっ、董子は初めてだっけ」

「うん、見かけたのは今が初めてかな」

チラっと、哲太さんと呼ばれた男性を見るあたし。大家さんの息子さんと聞いて、あたしはどんな人物なのか興味が湧くのだった。

藤井くんはそんな様子に気が付いたのか、簡単に哲太さんの事を教えてくれる。

第6杯？

「確か——夜中とか、C a f eにいる事が多いかな。とっても無口な人でね、あまり話をしているのを見た事ないな」

「そうそう、俺はよくマス姉に絡まれてるのしか、見た事ないぜ」
「そうなんだ、それにしても大家さんと雰囲気がちがうなあ」

飲んでいたコーヒーを置いてから、テーブルにある参考書っぽいものを手に取る藤井くん。それをパラパラめくり、内容に目を通している。

「まっ話はそれぐらいにして、洋輔の勉強会始めようか」

「ですね、あたしは何教えればいいのかな？」

「宮野さんには、どんな感じに勉強するか、要領を掴んでもらってから、交代してもらおうかな」

「わかりました。とりあえず出番が来るまでは、あたしも自分の勉強しようかな」

「うん、それがいいよ」

「はい、わからない事があつたら聞いてもいいですか？」

「遠慮なく、聞いてくれていいよ」

「ありがとうございます」

あたしは藤井くんをみながら、軽く頭を下げて微笑んだ。

そんなあたしたちの会話に、洋輔は少しイライラしている模様。

「そのこのふたり、イチャついてないで、勉強教えろよ」

「全然イチャついてないから、ほら、洋輔はコレ解けるようにする！」

「その前に慎一、この数学の問題の解き方教えてくれよ」

「この前のか……これはココをxと考えて、yの値から出して計算していけば——」

しばらくこんな会話が繰り返されながら、ヒントを藤井くんからもらい、洋輔が数学の問題を解いていく。

本格的にふたりは勉強を開始し始めたのだ。

真剣なふたりをよそに、あたしも交代するまで、自分の勉強を見直す事にした。講義で習った事を思い出し、ノートを見返しながら、復習する。

時間が経過して、集中力をかくようになっていたあたしは、ガラス越しに広がる風景を眺め始めていた。

「——天気悪いな」

この一言で、どうやら、集中力をかいていたのは、あたしだけじゃなかったみたい。cafeのガラスの向こうに黒っぽい雲が広がってきているのを見たのか、洋輔がそうつぶやいた。

「そうね、崩れそうね——雲ゆき」

あたしは何気なく、ガラスの向こう見て言った矢先だった、透明なガラスにポタポタと大粒の雨が降る。降り始めで、まだ所々にしか、大粒の雨が打ちつけていないようで。

「降ってるみたいだね——もう」

藤井くんの言葉をキツカケに、いつそう激しく雨が街に降り注ぐのだった。

第7杯 大人の恋愛事情

「天気悪いから、店——ガラガラじゃなくね」

洋輔の言葉でCafeの隅々まで見わたした。誰もいないCafeはあたしたちの貸切状態。

この状態を目の当たりにして、あたしは苦笑するしかなかった。そんな洋輔とあたしの様子に、藤井くんが気を使ったようで——

「ふたりとも、集中切れたみたいだから、休憩はさもうか」
「——ですね」

「次、宮野さん交代で大丈夫？」

「なんとか……やってみます」

「うん、お願いするよ」

あたしたちの会話がまとまってか、洋輔は立ち上がり身体全体を伸ばし始めた。凝り固まっていた身体をほぐしたかったみたい。席に座ると、今度はあくび。

「眠そうね」

「まゝな」

洋輔はそのまま上半身をテーブルに伏せ、虚ろな顔。それ以上話掛けなくなって言われている様な気がして、あたしは藤井くんに話を振る。

「藤井くんは？」

「俺っ？ ちょっと疲れてるけど、大丈夫だよ」

「宮野さんは眠くないの？」

「今はそうだな——お腹減ったかな」

「じゃ、なんか食べにでも行くかい？」

「あつ！ 食事は大家さん用意してくださるって」

あたしの言葉に、ムクツと起き上がり、大声を出した洋輔。

「やったー！ー！」

周りにはお構いなしにガッツポーズをするから、あたしのとこまで伸びた洋輔の腕が、当たり掛けるのだった。

「シー声大きいっ、あと、いきなり腕も伸ばさないで」

「悪い悪い、ついつい」

「ついついね……」

悪気なさそうな表情の洋輔を、あたしはひと睨みする。

あたしたちの不穏な空気を察知したのか、急にしゃべり出す藤井くん。

「あゝ、食事作ってもらえるんなら、助かるね、宮野さん」

「えっ——ええ。そうですね」

答える為にあたしは藤井くんの方へ顔を向ける。そんな彼は洋輔からすっかり注意を自分自身に向ける事に成功したので、ホツとしている様子。

「じゃあ、どうしようかな」

「あたし大家さんに言って頼んできますね」

「うん、そうだね。それがいいね、なっ洋輔？」

「あつああ。腹減って集中力切れたしな」

ふたりは示し合わせたように、会話を進める――まるで、
相談でもしていたかのように。

そんな彼らが気の毒そうだから、洋輔の事は水に流す事にしてあげて、あたしはそのまま会話を続ける事にした。

「じゃあ、サンドイッチとか軽食類ですけど、何かリクエストは？」

「なんでもいいよ、俺は」

「俺も、なんでもオツケイ」

「はあゝい。じゃ、頼んできます」

愛想よくふたりに返事をして、席を立った。大家さんたちがいる
カウンターへ移動する為に。

第7杯？

カウンターには大家さんの姿がない。休憩にどこか出て行っただか、奥にある部屋で休んでいるんだろうなと、そんな事を思いながら、目の前の”哲太さん”に仕方なく声をかける。

「食事お願いします」

「ああ、きいているよ」

「皆、なんでもいいみたいで」

話しかけた相手に、あたしは肩をすくめ、苦笑してみせたけど、話が続かなそうな雰囲気。

その雰囲気には耐えられなくなつて、あたしはカウンターを離れようか、と思つたけど、もう一度話しかけてみる。

「あゝあの——はじめまして、宮野董子です」

声に反応してか、作業中の”哲太さん”があたしをチラつと見る。

「ども、ココのオーナーの息子で、哲太と言います」

「お話は伺いました。ふたりから」

「そう……じゃ作業の続きいいかな？」

「あ、はい」

「できたら、テーブルに持つていくよ」

「はい、お願いします」

ぎこちない会話を済ませたあたしは、ふたりの元へ、今度こそ戻る。

ふたりから感謝の言葉をもらい、そのままあたしは元の席に座つ

た。それぞれ食事が来るまで、思い思いに時間をつぶす事に。

洋輔はやっぱり寝る体制を取ってる。藤井くんは読書を始めたみたい。あたしはと言うと、本を読みながら、暇ついでにふたりを観察してみた。

ほんの少し時間が経った頃、香ばしい匂いがC a f e に漂い出す。いい香りに、本から目を逸らし話しかけて来た藤井くん。

「いい匂いだね」

あたしも藤井くんに応える為、本から視線を彼に移す。

「ええ、とっても」

「宮野さんはどの大学？」

「あたしは桜花女子短大」

「そう、講義大変だろう？」

「そうなんです——もっと、短大って楽なのかと思ってたんだけど」

「講義がぎつしりで大変らしいね」

「はい、思ってた以上に……大変で」

「いつも部屋で勉強を？」

「一応……講義の復習と予習をしています。藤井くんは——」
「お待たせ……」

その言葉であたしたちの会話がさえぎられるのだった。目の前にはおいしそうな両面トーストしたパンで作られたサンドイッチ。それを持って来たのは、作ってくれた哲太さんだ。

「ありがとう、哲太さん」

「ありがとうございます」

「ああ、頑張って」

「はい」

サンドイッチのお皿を受け取った藤井くんはテーブルの各自座っている場所に、置いてくれる。

あたしは隣に寝ている洋輔を揺さぶり起こした。彼は起き上がり、口をこれでもかと言うつぐらいいに開けて、アクビした。

「……ふあゝあ」

アクビで眠気が飛んだのか、今度は窓の外を気にし出した洋輔。

「——あれっ？」

第7杯 ？（前書き）

小説の色変えてみようかと、思いました。
いきなりですが、独断と偏見でカラーテーマを変更します。
もし、気に入らない場合はどなたか、ご一報くださいね。

10/25 choco

第7杯？

「んっ、どうかした？」

「いや、あれ？ マス姉じゃなくね……」

洋輔は自身なさげに、外のある場所を見つめたまま呟く、その視線の先をあたしは辿るのだった。

あたしたちがCafeの外を、目を細めてみる様子に、藤井くんはいぶかしげそうな声を出す。

「どうかしのかい、ふたりとも？」

「……ずぶ濡れで、歩いてる女の人がいて」

「どこに？」

「慎一、後ろ……見てみるよ」

「たぶん、見間違いじゃないと思う。あの服は――」

あたしがマス姉と確信すると同時に、ふたりもとても心配そうな声で話す。

「様子がおかしい、普通じゃなくね？」

「……確かに、様子がおかしいな」

ふたりも、大粒の雨が降りしきる外の様子を伺っている。

あたしは、なんだか心配になってきた――今日、
元気がちよっとなかったマス姉の事を思い出すと。

「――か、傘取ってくるね、あたし」

いてもたってもいられず、あたしは既に、席を立ち、歩きかけよ

うとしていた。

そこへ誰かが、あたしの腕を掴んだ。

「っえ——？」

「……これ」

掴まれた腕の方を見上げると、ものすごく顔色の悪い様子の哲太さんがいた。心配そうな顔で、傘を握りしめている。彼の強い力で引っ張られたあたしの腕が、少し痛んだ。

あたしの微妙に引きつった顔の様子に気づいたのか、慌てて謝ってくれるのだった。

「あつごめん、俺——」

「大丈夫です、あたしは……」

あたしがそう言って少し微笑んだら、ホッとした様子で、あたしの腕を掴んでいた手の力が緩む。

哲太さんの方へ向きなおしたあたしは、彼の手から傘を受け取るのだった。

「傘……使いますね」

「——ああ」

今だ、不安そうにしている哲太さん。あたしはそんな彼をおいて、急いでハイツの出口へ行く。出口を出ようとハッと息を呑む。

暗い雨の中、車のヘッドライトが、目に飛び込んだ。目が眩むほど、それは眩しく、思わずまぶたを閉じた。

それまで、まぶたを閉じていたのを、車のブレーキ音と共に開ける。

「待ってくれ、ますみ」

「ここへは来ないでって、言っであつたでしょ」

岡島ますみと男性が、あたしの目の前でもめている。男性は車から顔を覗かせていた。言い合いに拉致が明かないと思ったのか、そのまま走り去って行った。

第7杯？

出て行くべきなのか、迷う。今、あたしが出て行ったら、どんな顔をするだろう、という思いがよぎった。

あたしなら——みられたくない、と思うだろう。それなら、何も見なかった事にして、戻るべきかもしれない。そう思い返してから、ハイツへ知らぬ間に戻っていた。

あたしがC a f eの入口を、開けた途端に、洋輔が怒る。

「トウコ、なんで、戻ってきたんだよ」

「今は行かない方が、いいと思ったから」

「なんだよ、それ」

「いいから、元の席に戻ろう」

怒ったままの洋輔の腕を掴み、あたしは、グイグイと彼の腕を引っ張り、自分たちの席に戻った。

あたしたちが戻って来た事に、藤井くんは不思議そうな表情。

「どうかしたの、ふたりとも？」

「俺もよくわかんね」

洋輔は彼にそう答えてから、あたしを冷たくみる。彼の視線の冷たさに耐えられそうもなく、さっきと同じ事を言うしかなかった。

「行かない方が……いいと、思ったの」

あたしの言葉に理解できずにいる彼ら。ふたり分の視線があたしを責めるのだった。

そんな中、C a f eの入口を見て、オロオロしている哲太さんが、あたしたちの目に映る。視線の先をあたしたちも、息をとめては見入った。

雨の中、マス姉はやつとの思いで、ハイツの入口の扉を開けていた。彼女の頬には涙が、こぼれている様にも見えた。

それが雨のせいなのかは、ここにいる全員――わからなかった。

誰も動く事ができずにいる。あたしも含め、みんなマス姉の事も、見つめる事しかできなかった。

「普通じゃなくね？」

張りつめた空気の中、口を開いたのは洋輔、それに藤井くんが、落ち着いた様子で答える。

「ああ、普通じゃないね」

「そうね、今日はそつとしておいた方がいいと思う」

あたしは顔を伏せ気味に、誰とも視線を合わせないようにした。

藤井くんはあたしの様子に、気が付いたのか、優しい言葉を掛けてくれる。

「何があつたのか、教えてくれないかな？」

「――あたしが、勝手に話すのは」

「わかった。何も話さなくていいよ」

「……ごめんなさい」

あたしは藤井くんの優しい気遣いに、なんだか申し訳ない気持ち

でいっぱいになった。

第8杯 指に光るモノ

「なんだよ、それ。全然意味わかんなくね？」

洋輔がまだ納得できていなくて、あたしはまた困惑する。

「これ以上聞くと、宮野さんが困るから、やめておこう」

しつこくする洋輔を、藤井くんが制止してくれる。

「様子が変なのは、明らかなのに、か？」

「ああ。様子がおかしいのは明らかだけど、宮野さん、問い詰めても仕方ないだろ？」

「そりゃそうだけど――」

洋輔はポリポリと顔をかくと黙り込んだ。

誰もそこで口を開かなくなる。

重ぐるしい沈黙をあたしが破った。

「――もし、降りてきたら、いつもの感じでいいと思うの」

「それがいいだろうね。何か悩んでるんなら、本人の口から言うだろうしね」

「……うん」

「まっ他人にあれこれ聞かれるのは俺も嫌だからな。もうなんもきかねえから」

あたしたちが相談の真似事していると、スーツを着た男性がCafeに入ってくる。

「いらつしゃいませ」

ハンカチで顔を拭いている男性に、カウンターから、哲太さんが迎えた。

Cafeをあちらこちら見ては落ち着かない様子の男性。

大人の男性とは程遠い行動の末、席を決めたのか、テーブルに座る。

「ご注文は？」

「あつ……その――」

せつかく座ったのに、スーツの男性は、哲太さんのいるカウンタ―に向かった。

咳払いで自分を落ち着かせる男性。

「上のハイツの住人の方と話がしたいんだがね？」

「失礼ですが、お客様は？」

「岡島ますみの上司で、忘れ物を届けに来たんだがね」

「では、こちらでお預かり致しましょうか？」

「いや、本人に渡したいんだ」

「わかりました。では少しお待ち下さい」

「ああ」

男性は来た時とは違って、とても落ち着いた様子。用が済んだのか、自分が選んだ席に腰掛けた。

ふたりのやり取りが、所々、自分たちにも聞こえたので、みんなお互いを見て目配せする。

「あいつ誰だろ？」

「さあ、誰だろうね」

洋輔と藤井くんのヒソヒソ話にあたしは参加せずにいた。

あたしの背後に哲太さんがいつの間にか立って、何かボソボソと言っている。彼が何をさせたいのかを理解した。

「———お願いするよ」

あたしが無言で、頷くのを見た哲太さんは、カウンターに戻るのだった。

「今の、何だったんだ？」

「どうかしたのかい？」

「なんでもないの———」

哲太さんの行動で、ふたりが動揺しているみたいだから、左右に首を軽く振って、冷静にあたしは応えた。

「あっあたし———」

「急になんだよ?」

第8杯？

急にあたしが立ち上がるとビックリしたようで、洋輔はこちらを見上げている。

「うん、ちょっとね」

あたしがそう言うと、納得してくれたのか、洋輔が席から出やすくしてくれる。

「戻って来るのかい？」

藤井くんもあたしを見上げた。彼の視線はあたしの荷物をさしている。

「戻ってくるので、少しの間、荷物お願いします」

黙って藤井くんはうなずいてくれるのだった。

あたしは安心して出入口の自動ドアへ。哲太さんに頼まれた事を実行する為、一度Cafeを出た。

ハイツの上上がる扉を手早く鍵で開けてから、3階まで急いで駆け上がる。3階の岡島ますみと書かれた表札の前で、あたしは息を落ち着かせた。

そして、インターホンを鳴らす。チャイムが鳴った後にインターホんに話しかけるのだった。

「あの、マス姉、もう帰ってきてる？」

「——何？」

「今、下のCafeに来れるかな？」

「……どうして？」

「マス姉の会社の人に来てて、何か渡したいらしくって……」

「それって、30代くらいの男性？」

「そうだよ」

「なら、帰って貰って」

「——でも、大事なものだって」

あたしの言葉を最後にマス姉は何も答えてはくれない。

5分くらいあたしが下に帰ろうかどうしようか迷っていたら、インターホンからマス姉の声がした。

「……わかった、行くから」

「じゃ、あたしは先に降りてます」

インターホンからはガチャッと音のみが聞えるだけだった。

あたしがC a f eに戻ると、ふたりが心配そうにこちらを見ている。

哲太さんに降りて来る事を伝えて、あたしを不思議そうに見つめる彼らの元に戻った。

「お帰り」

席に座ったあたしに藤井くんが何気に声を掛けてくれる。

「……ただいま」

「呼びに行ったのか、マス姉を？」

あたしや哲太さんの行動をみて洋輔は気が付いた様子。

「——うん」

「なんか、おかしいと思ったよ。トウコも哲太さんもコソコソするから」

「ココは何も聞かないでおこう、洋輔」

意味あり気な目であたしを見る洋輔は、藤井くんの言った事をすんなりと納得した模様。

「わかったよ、慎一」

ふたりの会話がちょうど、終わった時、c a f eの自動ドアが開いた。

そこから、少し疲れた様子のマス姉が姿を現すのだった
スーツの男性が彼女に気づき、ハッと立ち上がる。

「ますみ……」

何も言わないままスーツの男性へ静に近づくマス姉。
彼も近づいて来る彼女に歩み寄る事もなく、テーブルに座り込んだ。

「——には……ないでって」

「なっなにっ？」

男性のテーブルまで来たマス姉は何か怒った様子。彼女が言った言葉が、聞き取りづらかったのか、彼は困惑している。

マス姉の名前を彼は緊張ぎみの声で呼ぶと彼女の顔色をうかがい見た。

「ますみ？」

あたしたちにも緊張が伝わってくると、そこにいる誰もが息を
呑むのだった。

第8杯？

岡島ますみは自分を一度落着かせようと、息を吸い込んだ。

そして、その効果が出たのか、言葉が鮮明に聞える。少し離れたあたし達にも聞き取れるくらいだった。

「なぜ、ここに？」

「君と話をちゃんとしたいから、来たんだ」

「ここへは来ないでって言ったわよね」

「……ああ」

「お互いのプライベートな領域には、踏み込まない、約束の、はず」

「ああ——でも、今はここにいる」

「あなたとは、いい解決策は話あえない」

神経がまいっている様子のマス姉は、テーブルから離れ去ろうとする。その時、男性が引きとめた。

「愛しているんだ、ますみ」

「久賀さん……放して」

「いや、放さない。君が僕の話聞くまでは」

マス姉に“久賀さん”と呼ばれた男性は、力強く彼女の腕を握ったまま、放さない。黙ったまま、何も言わずふたりは見つめ合っていた。

「あれ、見るよ」

洋輔がそう言って指さしたのは、今にでもカウンターを飛び越え

そんな哲太さんだった。

あたしの目から見ても、彼はふたりの様子に、動揺しきっている。哲太さんもあたし達も、みんなふたりの様子を見ているしかなかった。

「ますみ、座ってくれないか？」

“久賀さん”は冷静にマス姉を席にうながし、座らせる。

「コレ、忘れたろ」

そう言っ取り出したのは女性物の雨傘。
無言でそれを受け取るマス姉。

「頼むから、そんな態度を取らないでくれないか？」

「この状況でどんな態度をしろって、言うの？」

「普通のだよ、冷静に話そう」

「今までどれだけ、あたしがあなたに……」

マス姉の言葉が途切れ、それ以上話を続けるのに戸惑っている様子。
戸惑いは“久賀さん”を想ってなのか、この場にあたしたちがい

るかなのかはわからない。

冷静な表情の“久賀さん”は、そんな想いを無視して、話の先をうながす。

「あなたに、その先は？」

「何度も、辛いおもいをさせられてきた」

「もうわかった……よ」

「あなたはあたしを愛してない」

少しずつふたりの感情がたかぶるのが、あたし達にもわかった。ふたりの声がどんどん大きくなっている。

「どうして、わかってくれないんだ」

「じゃなきゃ、こんなにあたしを苦しめられる訳ない」

「今までうまくやってこれたじゃないか」

「よしてよ——もう、疲れたのよ」

「なぜ、今になってなんだ？」

「あたしも、自分の人生を歩きたいの」

「もう、歩いているじゃないか？」

「いいえ、あたしがあなたと一緒にいる限り無理よ」

「君なしで生きていけと……」

「今更、よくもそんな事を又ケ又ケと言えるわね」

久賀さんに対して嫌悪感が増したマス姉。涙ぐむ目から涙を流さないように必死にこらえている。

ふたりの今の会話だけじゃ、あたしたちには、事情がまったくの
み込めないのだった。

第8杯 ？

「——お互いわかつていたはずだろ？」

「わかつていた？」

「ああ、大人の付き合いだろ」

「本気で言ってるの、それ？」

「今さら、なんなんだよ」

“久賀^{くが}さん”の悪態をつく姿を見て、心底マス姉は落胆している。今までの憤りの限界が達したらしく、いつの間にかふたりのいるテーブル前に哲太さんが立っていた。

「あんたなあ、ふざけるなよ！」

哲太さんは座っている“久賀さん”の首根っこを勢い良く掴んだ。突然の事に驚き慌てふためく“久賀さん”の姿は、本当に怯えている様。

「あれ、止めに入った方がいいんじゃないかな？」

「いいじゃなくね」

藤井くんがそう言ったのを、涼しい顔で即答する洋輔。

ふたりのやり取りを見ていたが、あたしは何も言えずにいたのだ。つた。

まだ、視線の先には首根っこ掴んだ哲太さんの姿がある。そんな彼に“久賀さん”は怯えながらも、反論する。

「なっなんだ君は。き、君には、関係ないだろっ」

「関係なくても、すみさんを悲しませる奴は」

ふたりの男の間にマス姉が割って入る。

「お願い、哲太」

“久賀さん”をかばうマス姉のすぐる顔が、哲太さんには切なすぎて、まともに見る事ができない。彼は腰砕けになった“久賀さん”の首から力なく手を放した。

「つたく、この男はお前に気があるんじゃないのか？」

「そんなんじゃない」

「なら——寝たのか？」

“久賀さん”の言葉に再度頭に血が上って、りんごのように真っ赤な顔の哲太さん。

「こいつっ!」

哲太さんが殴り掛けたのを、マス姉がもう一度止める。

「やめて!」

「こんなすぐ暴力をふるう男、どうせ学がくもないんだろ」

「今、そういうのは関係ないんじゃない。それに哲太とは寝てなんかいい」

「だろうな、君には不似合だ。こんな暴力男」

ネクタイを締めなおした久賀さんが、クズでもみるよな目を哲太さんに向けた。

「君は引っ込んでくれないか」

哲太さんの肩を手で押しのける。そして、視線をマス姉に移すのだった。

「やっぱり、僕の事を愛しているんだろう。だから、かばってくれたんだろう、ますみ」

そう言つて、マス姉の肩を抱き寄せようと、“久賀さん”は腕を伸ばす。ところが、彼女はその腕をスルリとかわした。戸惑いのせいなのか、彼の顔が少し険しくなる。何も言わずただ黙ったままジツと彼女をみるのだった。

マス姉はそんな“久賀さん”を見ずに、荷物を彼に押し付ける。

「はい、コレ。もう——十分でしょ」

納得できない“久賀さん”は皮肉交じりに鼻を鳴らした。

「フン。よく……わかったよ」

「なら、もう用はないでしょ」

マス姉はCafeの出口の方に腕を伸ばして、ココから出て行く事を、“久賀さん”にうながす。今度はしつかり、彼の顔を見据えるのだった。

観念した様子の“久賀さん”は無言で歩く。その後ろにマス姉がついて歩く。ゆっくりと出口に向かうが、急に彼がピタッと歩みを止める、出口の前で。

「ああ、そうだな。こんな気配りのない店員とほとんど客がいなくて、薄汚い店には用はないね。言っちゃなんだが、出されるコーヒ

「もまずそうだ」

自動ドアが開いて、何かが、自動ドアの向こうにある壁に勢いよく吹っ飛んだ。

第8杯？

壁際で男は突然に訪れた思わぬ報復に驚いた。

「ななな何、するん、だ」

殴られた顔が痛いのか、男はその場でのたうち回っている。

ふたりの近くにいた哲太さんも、離れた場所にいるあたしたちも、その瞬間、何が起きたのか、理解できなかった。

マス姉は吹っ飛んだ“久賀^{くが}さん”に、ソツと手を伸ばす。彼はその手を無防備にも掴もうと、左手を差し出した。困惑する彼の左手のひと指しゆびから、鈍く光るモノを取ると、彼女はハイツの出入口から、力いっぱいどこか遠くへ投げる。

それは車のヘッドライトに反射して、ピカピカとキラメキながら、暗闇の中に消えていくと共に、ドスのきいた声がするのだった。

「ざっけんなつ、クソ野郎おおおおお！」

何かをずつとこらえていた怒りの声は、マス姉のものだ。

「まままま、まさか……ますみ、ききき君が——ぼぼ僕を？」

「そうだ、あたしが殴った」

やっと理解をした“久賀さん”は、へたり込んだまま動けそうにもないようだ。

「あたしの事はいい、でも……哲太の事や、彼が大切にしてる物を侮辱するな」

マス姉をまるで、初めて見たかのような表情をする“久賀さん”。何も言えずに、無駄に呆けているだけで、まだ奮い立てそうもないようだ。

「もう……ココへは、本当に二度と来ないで」

“久賀さん”は黙ったままだと頷く。間を置いてから、ゆっくりと床に手を突き、立ち上がる。それから、左の人差し指があるモノを探す為か、さする様に触れるのだった。

「ぼ、ぼ僕のゆゆゆ、指輪、は」

「……探せば――」

マス姉が冷めた眼差しで言い放ち、ハイツの外の暗闇を指差す。そして、自動ドアをくぐり入ると、1ミリの隙間もなく、自動ドアは何事もなかったように閉まる。彼女はガラスドア越しの“久賀さん”を黙って見つめる。

“久賀さん”はクタクタになった服のような足取りで、力ないヨタヨタした歩き方で、C a f e から去っていくのだった。

あたしたちのC a f e から、こうして“クソ野郎”は消えて居なくなった。視線の先にはマス姉と哲太さんのふたりだけが残った。

「ますみさん、俺……」

哲太さんはマス姉にそれ以上何も言えずにいる。それは自分だけが潤んだ彼女の瞳を見たからだだった。

「これで、おしまい。何もかも終わったんだ――だから、んな顔するなって……」

複雑な顔をする哲太さんに、マス姉が強がってみせる。無理に笑った彼女の顔を見て、とても苦しそうに自分の胸のあたりの服を、彼はギュッと握り締めるのだった。

第8杯 ？（後書き）

この第8杯はこれ以上になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0387q/>

～ Cafeハイツへようこそ！ ～

2011年12月5日20時52分発行